

にしあいづ物語100選 その47

文：伊藤 光吉

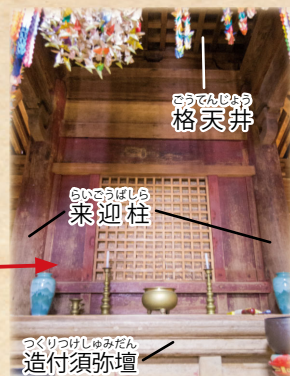
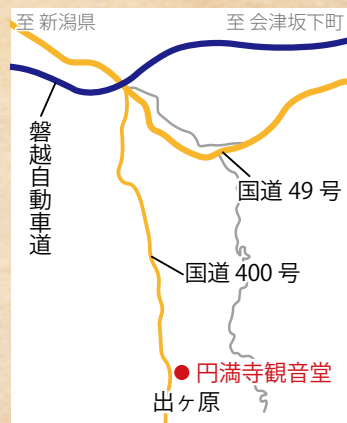
円満寺観音堂

出ヶ原集落にある円満寺観音堂は建武2年（1335）、会津領主芦名遠江守盛宗の息子盛員とその息子隆盛が北条時行に従い、「中先代の乱」にて戦い、相模国片瀬川（今の神奈川県鎌倉市付近）で共に戦死したことから、盛員の妻が夫と子を弔うため、翌年の建武3年（1336）に飛騨の匠 水口入右衛門の手によって建立したと伝えられています。建築の形式や技法から見て、鎌倉時代後期か南北朝時代初期のものと思われます。

昭和38年（1963）、国指定重要文化財（建造物）の指定にあたって、「会津地方にはこうした唐様仏堂は多く見受けられるが、円満寺観音堂は代表的で細部手法がよくまとまっている。特に軒廻り、小屋組にいたるまで創建当時の材料が保存使用されており、当時の技法を知る上からも極めて貴重な古い建築と云える」と称賛されました。

円満寺観音堂は南北朝時代の三間堂、入母屋、総檜材、茅葺であり、梅宮茂氏著『会津の美術』（昭和49年刊）でも、「外観は唐様建築、粽形の総円柱、斗拱は三斗組、中備斗を設けるが間斗束はない。屋根は入母屋造り、茅葺で、軒は二軒本繁垂木、内部は来迎柱で内外陣に分かれ、外陣は化粧屋根裏、内陣は大虹梁を渡し、大瓶束をすえ、中央一間は格天井、正面に造付須弥壇、後方に張り出し厨子があり、格子戸建ての特異な厨子を構成、総じて唐様建築手法、南北朝初期の形式技法で創建は建武3年（1336）になるだろう」とされています。

なお、円満寺観音堂はもともと集落中央の真言宗円満寺の境内（出ヶ原集会所の周辺）にありましたが、昭和45年（1970）の解体修理の際、現在地に移転されました。



円満寺観音堂

造付須弥壇

今月の表紙

今月は、大山祇神社で2月11日から12日にかけて行われた旧暦元旦祭（二年参り）より。11日の午後10時には地元有志の皆さんによる歳ノ神が行われました。集まった参拝客の皆さんは、パチパチと音を立てて燃え盛る炎に、今年一年の無病息災、五穀豊穡を祈っていました。



編集後記

今月号の特集で紹介した「ふくしま健民アプリ」を2月から試しに利用しています。このアプリでは、歩数に応じてポイントがもらえますが、スマホを持ち歩くことを忘れてしまい、なかなか歩数が伸びません。春を迎え、目標の1日8千歩に向けて、積極的に取材に出掛けたいと思います。（秦）